

インクルーシブ保育 プラスワン

[こんな場面で、どうしよう?] 指示が伝わらない 編



朝の会が終わり、「今から帽子と水筒をもって、お外に行きましょう。」と、**保育者が全体に指示**を出しました。
みんなが席を立て準備を始める中、周りをキョロキョロしながら、**ハナコちゃんはぼんやり立ちつく**しています。
一人残ったハナコちゃんに、保育者は「先生は、今なんてお話ししたかな?」と尋ねると、ハナコちゃんは愛想笑いをするだけです。



そんなときは・・・

『個別に、短いことばで指示しましょう。
視覚的な支援も有効です。』 (注意力および聞く力の弱さへの配慮)

そこで、保育者はハナコちゃんに**個別に指示**をすることにしました。
短い言葉で、「お外に行くよ。」と、部屋の外を指さしながら伝えると・・・

あれれ・・・失敗!?



○ ハナコちゃんは何も持たずにお部屋を出ていこうとしました。
○ 保育者が慌てて、「待って! 帽子と水筒を忘れてるよ!」と後ろから声をかけましたが、ハナコちゃんはそのまま行ってしまいました。

動画はこちら

－なぜだろう?－

1. 聞き取れる情報が限られている
「お外に行こう」という言葉で頭がいっぱいになり、それ以外の情報が頭に入らなかった(聴覚記憶の弱さ)。
2. 言葉を聞いて、すぐに実物をイメージできない
言葉を瞬時にイメージすることが難しいので、自分がイメージできる言葉だけに反応した(認知の偏り)。

ここが支援のプラスワン 《言語理解の特性に配慮》



漫画版はこちらから

こうすれば**成功!!**【水筒や帽子を持って、外へ行けた!】

1. 話す順序を工夫した(聴覚記憶への配慮)
「帽子をかぶろう」、「水筒を持っていこう」、「お外に行こう」と実行してほしい順に伝えた。
2. 指示を視覚的な情報で補助した(情報の視覚化)
帽子と水筒を身につけた絵カードを使い「お仕度しよう」と指示した。



「プラスワン」を深めよう

単に「指示が伝わらない」と言っても、**子どもによって、その理由は異なります**。言葉の発達がゆっくりな場合は、子ども自身が知っている言葉(語彙)が少ないために指示が伝わりづらくなります。日常会話ができる程度に言葉が発達している場合でも、言葉を音の響きとして捉えていて、**イメージと結びつきづらい**事例もあります。さらに、発達凸凹な子どもの中には、聞いたことを記憶する力(聴覚記憶)が弱い事例が多いことも知られています。私たち保育者は、目の前の子どもがどこにつまづいているのかを見極めることが大切です。

言葉をイメージと結びつけることが苦手な子どもでは、よく知っている言葉への反応は良いので、自分が好きな虫や電車に関する言葉にはよく反応しますが、それ以外の言葉への反応は乏しくなりがちです。大人でも、「オンデマンド」や「コミットメント」など、よく聞くけれど、意味を熟知していない言葉には反応が乏しくなりがちなのと同じです。このような態度は、「興味のあることにしか反応しないワガママな子」と誤解されることがあります。**できないことを意欲の問題にせず、発達の弱さとして捉えること**で支援の道筋が見えてきます。